みなとまち新潟 歴史探訪 36

問 歴史文化課
☎025-385-4290

新潟海岸と海岸砂防林～松林の始まり

江戸時代の新潟は、海岸の砂丘地特有の問題を抱えていました。季節風による飛砂（ひさ）の被害です。砂丘に近い寄居村は特に被害が大きく、宝永・正徳年間（1704～16）のころには村の大半が砂で埋まり、人が住めない状態でした。農作物も被害を受け、村は移転を余儀なくされました。風下の新潟町でも、寺院や民家に砂が吹き込むほどでした。

飛砂の対策として実施されたのが松などの植林です。樹木が根付くことで風が弱まり、砂が飛ぶのを防ぎました。新潟町では長岡藩領時代の宝暦年間（1751～64）ごろに植林が本格化し、天保14（1843）年に幕府領になった後も新潟奉行を中心に継続されました。初代奉行の川村修就（ながたか）は植林範囲を広げ、嘉永2（1849）年までに植えた苗木は約2万6千本に達しました。また、砂防事業を担う役職を奉行所内に新たに設け、対策を強化しました。

飛砂の克服は砂丘地新潟の悲願であり、植林は近代以降も続きました。現在も新潟海岸に広がる松林は、新潟の人々と砂との闘いの証でもあるのです。

「新潟海浜松苗木植付場所図」
（部分、新潟市歴史博物館蔵）
修就が植林を行った様子を描いている

現在も海岸沿いに広がる松林は
「日本の白砂青松100選」に選ばれている
（写真は中央区関屋付近）